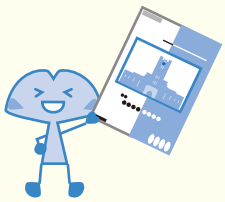
学内広報

2016.2.23 no.1478

駒場図書館公式キャラクター
「こまとちゃん」

誕生日：2002 年 10 月 2 日
性別：なし（建物なので）
性格：無邪気でいたずら好き
好きなもの：よく学び、本を大切にする学生さん



教職員の思いから生まれた伝統のプロジェクトに危機

外国人留学生支援基金にご支援を

日本最大の図書館フェアで2つの名誉を獲得

図書館界に東大旋風!!

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

教職員の思いから生まれた伝統のプロジェクトに存続の危機…

外国人留学生支援基金

事業の三本柱

見舞金給付事業
（10万円以内）

支給実績14名

・隣室からの出火によって家財に損害

・海外実習中の怪我のための手術・入院・通院費

奨学金給付事業
（月額5万円）

年間30名採用

・累計約500名の大学院生へ給付

一時金貸与事業
（原則20万円以内）

貸与実績113名

・授業料免除不許可だった留学生へ

・不測の事態（事故や病気・災害等）で家賃を支払うことができなくなった留学生へ

このうち、平成27年度の予算額で一番大きいのは奨学金給付事業での900万円。続いて一時金貸与事業が200万円、見舞金給付事業は100万円となっています。次期繰越額は平成26年度に約4098万円あったのが平成27年度は2773万円に。台所事情は悪化中です。

過去に支援基金を利用した留学生の出身国・地域（一部）

支援基金を利用した2人の留学生に聞きました

――留学生支援基金で見舞金を支給されたときのことを教えてください。

宋●私は、昨年の3月、GCL（博士課程教育リーディングプログラムの一つ）のヘルシンキ大学とのプロジェクトでフィンランドに行き、野外活動の一環で皆とスキーをした際、転倒して右大腿骨を複雑骨折しました。板が外れなくて……。救急車で9時間かけて大病院に運ばれ、2日間に及ぶ手術を受けて1週間入院。帰国後、合併症や薬物の影響で病状が悪化し、都内の病院で通院治療と入院を繰り返し、6月にやっと通学を再開しました。

――現地の入院費はどうしましたか？

宋●請求書払いにしましたが、保険がなくて全部で100万円以上かかりました。お金の心配もあり、病院に相談して飛行機に乗ってもいいという最速のタイミングで退院させてもらって帰国したんです。

カレル◆私は、昨年4月25日、母国でフィールドワーク中に大地震に遭遇しました。ネパール移民についての論文のため、首都カトマンズの喫茶店で聞き取り調査をしていた最中に激しい揺れが起こり、店から走って逃げました。幸い怪我は軽かったのですが、研究成果を保存した大事なPCが壊れてしまいました。その後、5月12日には故郷・ドラカ郡スンカニ村を震源とする大余震があり、私の実家も全壊。子どもたちを安全な場所に避難させたり、復興作業を手伝ったりして、滞在予定を延長せざるを得ませんでした。

――大変でしたね……。その後お二人は基金を利用することになりましたが、そもそもこの基金は知っていましたか？

カレル◆いえ、知りませんでした。帰国後に研究科の窓口で事情を話したら、こういう基金があるよと事務のスズキさんが教えてくれたんです。スンカニ村の役場が発行した被害証明書と全壊した自宅の写真をつけて申し込んだら、夏に見舞金5万円が振り込まれました。応募書類は指導教員の先生が書いてくれましたし、応募に関して苦労はありませんでした。

宋●私も知りませんでした。でも、指導教員の先生がこの基金の運営委員の一人で、たまたま基金の会議に出席した当日に会って話す機会があったので、教えてもらえました。ラッキーでしたね。

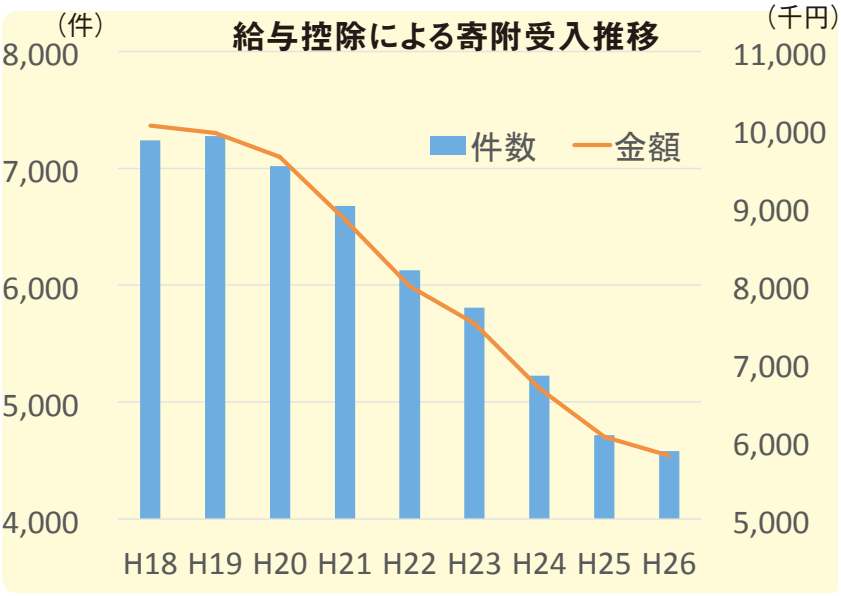
――主に教職員の寄附で成り立ってい

フィンランドで活動中に脚を骨折

工学系研究科
都市工学専攻
博士課程3年
宋知苑さん
Song Jie Won
都市デザイン研究室で歴史的建造物や文化資源の保存について研究中。

にご支援を

2005年から続く外国人留学生支援基金をご存じでしょうか。生活不安に陥った留学生の一助に、との教職員の切実な思いから1998年に設立された外国人留学生後援会を引き継いだのが、この基金。ここでは、支援減少によって縮小せざるを得ない近年の状況と、留学生の声をお届けします。月額500円からできる国際貢献をご検討ください。



「外国人留学生支援基金」は、東京大学基金の中で最も歴史のある寄附プロジェクトです。1997年のアジア通貨危機の際、生活不安に陥った留学生を少しでも助けたいという教職員の思いから発足しました。本基金では、奨学金だけでなく、授業料免除申請不許可時や奨学金入金までのつなぎとして貸与する「一時金貸与事業」、事故・災害での被害や入院などの不測事態に対する「見舞金給付事業」などを実施しています。特に一時金貸与事業は、学内外を見渡しても同様の事業はなく、異国で留学生活をする学生のセーフティーネットとなっています。しかし、近年は支援が減少しており、この状況が続けば各種事業の規模縮小を検討せざるを得ません。留学生の数が増える中、本基金の維持・拡大は必須です。教職員の皆さまのご支援をお願いいたします。

……

ネパールでフィールドワーク中に大地震に遭遇

学際情報学府学際情報学専攻　博士課程3年
カレル・ディペシュ Kharel Dipesh さん
研究テーマはネパール移民の現状。「Playing With Nan」等のドキュメンタリー作品も発信中。

る基金だというのはご存じでしたか？

カレル◆知りませんでした。学生を守るのは大学の責任かもしれませんが、基金のおかげで温かみを感じ、精神的な支えも得られました。**大学が留学生をケアしてくれている、東大のコミュニティに入っている、と実感**できて嬉しかったです。母国の復興は途上で、私の精神的ダメージもまだ回復していませんが、この支援を励みに論文を仕上げたいです。

宋●額は大きくなくても**大学がサポートしてくれていると感じられる**いい仕組みだと思います。でも、私も知りませんでしたし、留学生にほとんど存在が知られていないのはもったいないですね。

――「留学生ハンドブック」には載っているようですよ。

カレル◆持っていますが、残念ながら読んだことはありませんでした。

宋●学生は知らなくても、教職員の方々が知っていてくれれば大丈夫かも……。

――そうですね！

担当理事からのメッセージ

理事・副学長（国際本部長）
古谷 研

本基金は本学教職員の方々からの寄附を主体に事業が開始され、現在では、その輪が広がり、卒業生の皆様や、学外の篤志家の方々からも支援を頂戴しています。奨学金の給付に加え、病気、けが等により入院した留学生に対する見舞金の支給や一時金の貸与など、セーフティーネットの役割を果たしています。

しかしながら、近年、寄附金収入は減少傾向であり、とくに本基金の主体である教職員の皆様からの給与控除による受け入れが急激に減少しています。このため、奨学金の給付等にあたり繰越金を取り崩さざるを得ないといった厳しい運営状態にあり、このままでは各種事業の規模縮小を検討せざるを得ない状況です。

本学は、優秀な留学生を積極的に受け入れて学生の多様性を拡大することを目指しており、本基金はそのための基盤整備となっています。留学生諸君が学習・研究に専念でき、また、充実した学生生活を送るために教職員の皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

給与控除は月額500円からOKです！

ご寄附の申込はこちらから→

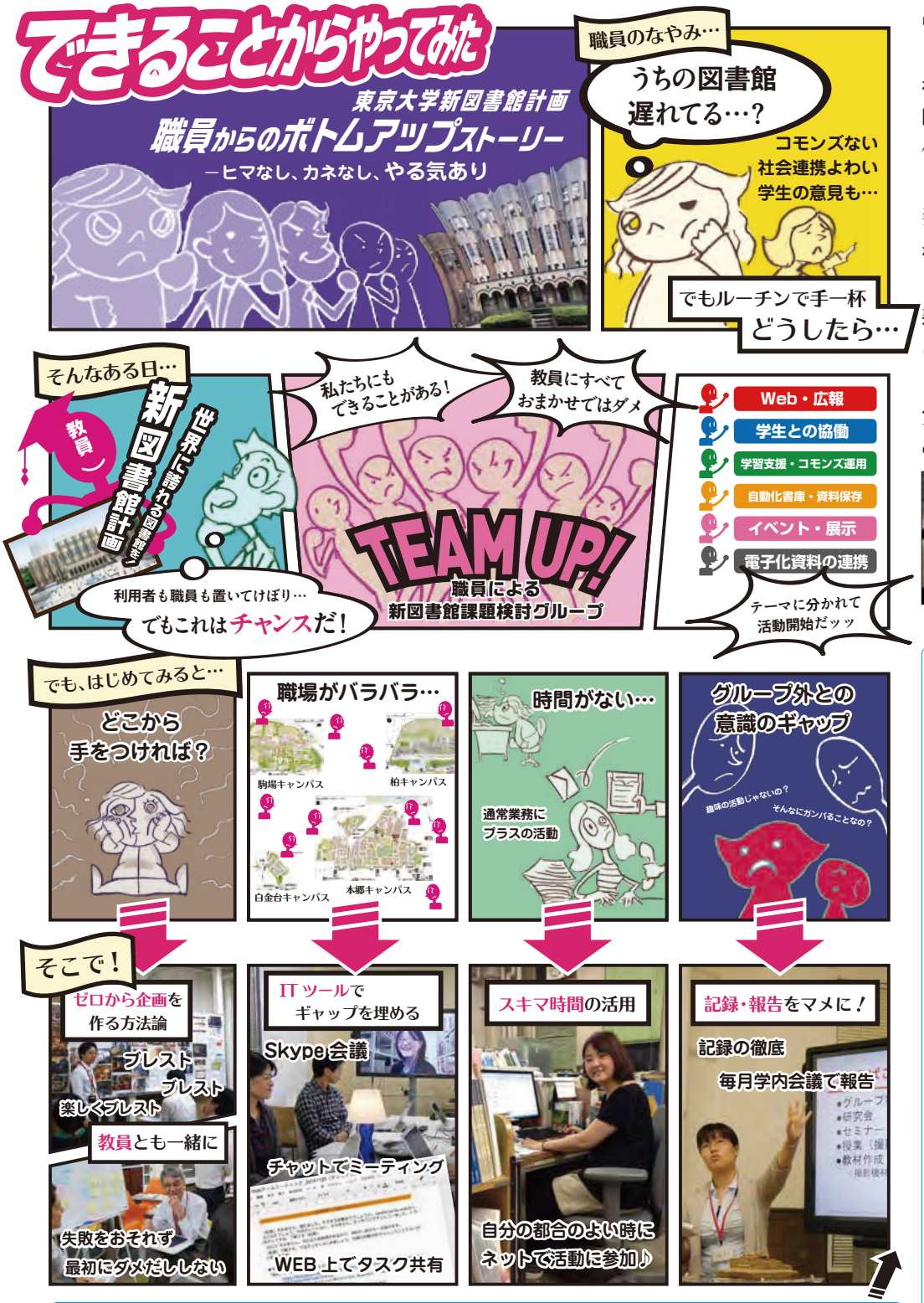
寄附の問い合わせ◎本部渉外・基金課
kikin@adm.u-tokyo.ac.jp（内線21217）

事業の問い合わせ◎本部留学生・外国人研究者支援課
seikatsushien@adm.u-tokyo.ac.jp
（内線22515）

日本最大の図書館フェア「図書館総合展」で2つの名誉を獲得

図書館界に東大旋風!!

名誉❶ 新図書館課題検討グループのポスター↓が最優秀賞を獲得！



……ポスターのつづきは Web で→ http://new.lib.u-tokyo.ac.jp/3529

会期中、研究者、学生、各種図書館、NPOなどの出展によるポスターセッションと来場者の投票が行われ、67の候補のなかから新図書館課題検討グループの作品が最優秀賞に選ばれました。未来の東大図書館の姿を描き出すべく検討を重ねてきた職員の取り組みと、そこから見えてきたものを、熟達したマンガ形式で見事に表現。「私たちにもできることがある！」との力強い宣言は図書館に限らず全ての職員を鼓舞するものです。

↑ポスターセッションの様子。

◉担当者より

新図書館課題検討グループ
（工学・情報理工学図書館）
鈴木剛紀

新図書館計画をより良いものにしたいという熱意を原動力に、部局横断の図書館職員ワーキンググループ（新図書館課題検討グループ）を立ち上げ、約3年間様々な活動をしてきました。東大図書館は、いま大きく変わろうとしています。私たちはこれからの図書館のあるべき姿を模索しながら、新しい図書館を先取りする試みに挑戦しています。東大図書館は、学生、教員、職員の皆様のために存在しています。みんなで一緒に、これからの図書館を作っていきましょう。ウェブサイト等で情報発信していきますので、これを機に「あなたの図書館」に、ぜひさらなる関心を持っていただければ幸いです。

本郷の法文２号館横では特設の新図書館計画インフォメーションルームがあなたの来室を待っています！→

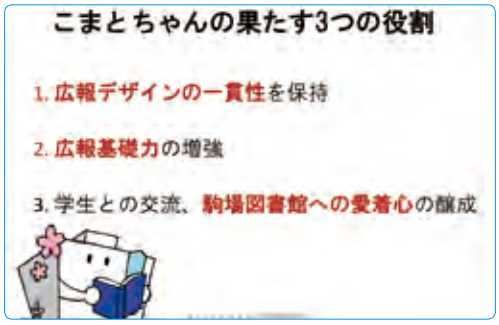
昨年 11月10日～12日に神奈川県のパシフィコ横浜において開催された第17回図書館総合展で、東京大学の図書館勢が 2つの栄誉を獲得しました。ポスターセッションとキャラクター・グランプリという両分野における大活躍の痕跡を、ポスターとプレゼン資料、2つの現物提示で紹介します。

図書館総合展とは？
http://www.libraryfair.jp
2016年で18回目を数える国内最大の図書館関連イベント。大学図書館に限らず全国の図書館関係者とつながり、読書・学修環境についての最新技術と知見を共有する場となっています。今回は会期中に100を越えるブース展示と約100のフォーラムが開催されました。

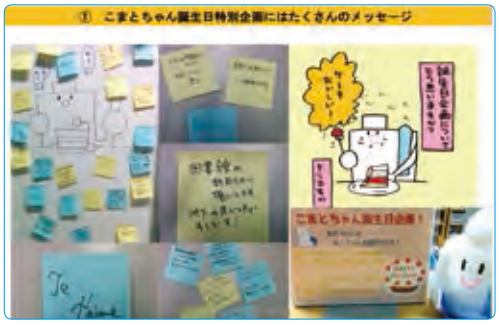
名誉❷ 駒場図書館のこまとちゃんがキャラクター･グランプリで入賞！

↑2006 年のオリジナルイラストがこちらのこまとちゃん。駒場図書館の配布物には必ずといっていいほど登場しています。

↑初登場からもう 10 年。ウェブ、配布物、グッズ、ポスターなど様々なところで活躍してきました。



↑特に、「3. 学生との交流、駒場図書館への愛着心の醸成」に大きな役割を果たしています。ありがとう、こまとちゃん。

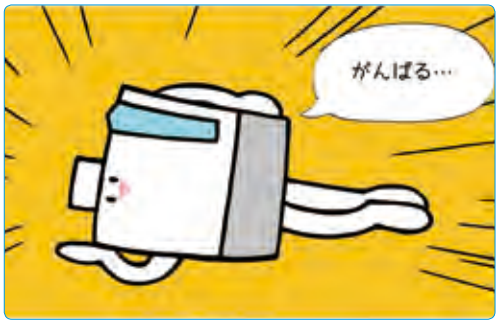


↑誕生日（現図書館開館記念日）には、こまとちゃんと駒場図書館への愛に溢れたたくさんのメッセージが届きました。

↑愛着心はこんな形にも。出典：洛魚「こまとちゃん誕生日企画！」東大まんがくらぶ『週刊スカラベサプリ』vol.75 (2015.10)

↑キモかわいいそうです。「こまとちゃんには実は足がある」設定は夏のうちわ配布イベントから。意外と好評でした。

↑ツイッターではこまとちゃんのオリジナルイラストが人気です。図書館の広報力も強化されました。



↑自由なこまとちゃんを見ていると自然と頬が緩みます。リラックスした気持ちになってもらえたら幸いです。

……活動のつづきは Web で→ http://lib.c.u-tokyo.ac.jp/komato-chan/

↓グランプリ会場のこまとちゃん。

今回初開催となった「図書館キャラクター・グランプリ」。全国から集った計142もの精鋭キャラたちがプレゼン大会で熱い思いを披露し、来場者と審査員による投票の結果、「館の働き者」部門でこまとちゃんが入賞（4～10位）を果たしました。グランプリのがまじゃんぱー（筑波大学附属図書館）には及ばなかったものの、学内でもまだ駒場以外での知名度は限られることを思えば大健闘。今後の働きも大いに期待できそうです。

◉担当者より

駒場図書館こまとちゃん推進部（仮称）の皆さん

テーマは遊び心。

2006年に描かれたこまとちゃん。某画伯によって「うざかわ」キャラに生まれ変わり、いまや学生から大人気。グッズを配布したり、職員が夜なべで作ったぬいぐるみをツイッターに登場させたり……これまでにない「ゆるめの」活動ができるのは、担当者の遊び心と東大生への愛ゆえ（そして理解ある上司！）。

予算がなくてもできることから少しずつ。今後は他のキャラとのコラボにも挑戦したい。アイデア募集中です！

@UTokyoKomabaLib

写真左から：田崎（ボス）、画伯（作画）、小原（企画・製作他）、松原（渉外・製作他）

農学生命科学図書館マスコットキャラ「のうとくん」も応援しました！→ @UTokyo_AgLib

ひょうたん島通信

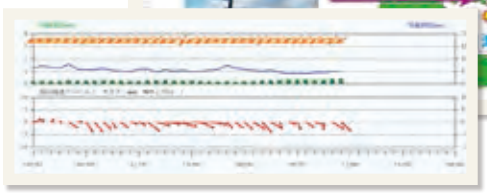
大槌発! 第30回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱(ほうらい)島という小さな島があります。
井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。
ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

海洋環境情報のリアルタイム配信

田中 潔 大気海洋研究所附属 国際沿岸海洋研究センター 准教授

→リアルタイム配信のホームページ（現在は一部休止している項目もあります）。



←長埼沖波浪ブイのデータ（2月7日分。グラフで推移が一目瞭然。

今号では、大槌湾の海洋環境情報をインターネット上でリアルタイム配信している取り組みをご紹介します。2012年3月の第3回通信で私は、大槌湾で海洋観測システムの復旧を急ピッチで進めていること、特にひょうたん島の横で水温の連続モニタリングを再開した様子などを紹介しました。その後、私たちは地域の方々からのご協力も頂き、海洋環境を監視する同様の装置を大槌湾に多数設置しました。その際、装置によって得られる時々刻々の環境データをインターネット上でリアルタイム配信することにも取り組みました。ウェブサイトへは、大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センターホームページ上のリンク画像（バナー）からや、「大槌湾海洋環境モニタリング」で検索していらしてみて下さい。

水温計は前回ご紹介したとおり、海洋環境を監視する上で最も重要な装置です。水温は海水の密度を変化させて海流を作ったり、生物の生育環境を決めたりします。栄養塩（硝酸）計も、生物の生育環境や生態系システムを明らかにしていく上で大変重要な装置です。波浪計は地元漁師さん達と相談して、湾内で最も波が強い場所（外洋から沢山の波が進入してくる場所）に設置しました。2013年の秋に台風が大槌湾を直撃したときは、5メートルを超える波高を記録しました（良く耐えました！）。そのほかにも、海況を決定づける海上風を測定する風速計（ひょうたん島へ掛かる突堤上に有ります）や、海況が実際にどんな様子か目で見てすぐ分かるWebカメラも設置しています。

これらの装置は、三陸沿岸の海水がどこから流れて来てどこに行くのか？　どれくらい沢山の海水が流れているのか？

どんな海水（暖かい・冷たい、栄養分が多い・少ない、など）が流れているのか？　などを私達が研究する目的で設置しました。しかし、それと同時にリアルタイム配信には、地域の市民の方々にも大槌湾の海況環境に広く関心を持って頂き、私達の日々の研究活動に一層ご理解ご支援頂けるようにとの目的もありました。実際、地元漁師さん達がご自身の養殖場環境を研究することにも活用しましたとの声を多く頂くことも出来ました。

調査船 弥生のつぶやき

科学がもつ夢とロマン

国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年になろうとしています。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のぴーちゃんの後を受け、このコーナーも担当することになりました。

新年早々、フィギュアスケートの羽生結弦選手が大槌町を訪ねてくれました。町の中心部を見渡せる城山や旧役場庁舎を回った後、小中学校で子供たちと交流しました。自身も被災者である羽生選手は、世界レベルの競技者として復興における無力感を度々口にしています。しかし、羽生選手と出会った子供たちの笑顔は、そんな思いを全面的に否定してくれたはずです。形になるものは生み出さないかもしれない。でも、羽生選手のスケートや生き様は、間違いなく被災者のみならず日本中の人々に夢や希望を与えています。重機が山を削り、埃だらけのダンプカーが走り回るようになった大槌町を見ていると、むしろ今こそ、羽生選手のような支援が求められているような気がします。国際沿岸海洋研究センターの科学研究は、震災影響や沿岸生態系再生過程の解明など歴史的にも重要な形ある成果を求めて精力的に進められています。でも、そろそろ科学のもう一方の力である夢とロマンを紡ぎ出す成果を求めてもいい頃なのでは……。そんな事を考えさせられた一日でした。

工事の進むセンター周辺。左端に見える現センターは、中央道路右側あたりへ移転する。正面に浮かんでいるのが私（弥生）です。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

集中連載

ビジョンのビジョン

起草メンバー座談会で見るその背景と展望

第2回／「卓越性」と「多様性」

鈴木真二（司会／広報室長）○「東京大学ビジョン2020」は、卓越性と多様性を基本理念の二本柱としています。ここに至るまでにはどんな議論がありましたか。

佐藤健二★科学哲学でincommensurabilityという語が使われる。日本語では「共約不可能性」と訳されます。異なるパラダイム間では同じ物差しが使えないことを指します。卓越性というと、比べてみてずば抜けて優れていることと理解されがちですが、それだけでは一つの価値尺度のなかでの競争にすぎない。でも、我々が生きているのは多様な価値が絡み合う場です。その両方の重要性をうまく表せないかという議論から始まったと記憶しています。

齋藤希史◆共約不可能性を認めながら、異なるものを相互に照らし合わせるような空間が大学だと思います。こうした議論を通じて、「場としての大学」という概念が強調されるようになりました。

藤井輝夫■比較して優越を決めなくても、互いに刺激し合うことはできます。それによって個々の卓越性はより価値を放つというわけです。

鈴木○多様性というのは複数性とは別ものでしょうか。

佐藤★多様性はある種の普遍性や公共性を前提とする。深さと広がりがある点が複数性とは違う。しかも複数性は外側から見ただけの概念ですが、多様性には内側から主体的につくる自覚が不可欠です。

齋藤◆動物園で檻に入れられた動物同士は相互の接触や交通がありません。これは多様性とは違う。多様性はもっとジャングル的なもの。檻がないから動物同士で食い合う懸念もありますが（笑）。

坂田一郎▼多様性と卓越性が重要だということは従来も言われてきましたが、両者を連環のメカニズムに組み込んだのが今回の特徴です。ビジョン内に出てくる「協創」という語も連環の重要さを表しています。

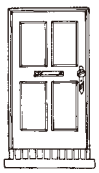
鈴木○ビジョンの構成は大きく４つに分かれていますね。これについてはいかがですか。

坂田▼全体としては、研究、教育、社会連携が、運営で結びついています。運営改革を結節点に他の3つが深く関連しあいながら進むイメージです。

齋藤◆1〜3を支える受け皿のようなものが4ですね。

総長●4つの柱に「国際」は入れないのか、という議論もしましたが、国際は全てに通底するもの。人類全体で見ると日本は多様性を支える重要ピースであるとともに、本学の教育研究活動は一国に閉じたものではないという前提が基本にありました。（つづく）

※1月8日の座談会の抄録です（ロング版は「淡青」32号に掲載）。



決算のDOOR

〜リローデッド〜

数字が導く東京大学の未来

第4回

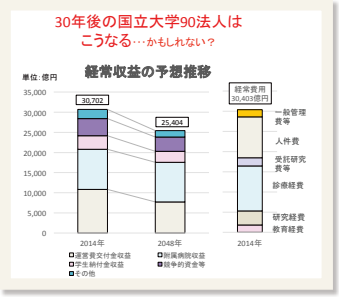
30年後の東京大学

こんなこといいな♪ 22世紀の未来からやってきたネコ型ロボット「ドラえもん」は、おなかの四次元ポケットから様々な未来をのび太君に見せてくれます。22世紀とまではいきませんが、今の学生さんが親となり、そのお子さんが大学生となる30年後の国立大学は一体どうなっているのでしょう？

keywordはずばり少子高齢化。現在12,694万人（2015.8.1確定値）の日本の人口は2048年には9,913万人と1億人を割り、生産年齢人口（15〜64歳）は30%も減少すると言われています。結果、所得税中心の税制度は脆弱化し、国立大学法人の基盤財源である運営費交付金がこれまで以上に削減されることは想像に難くありません。頼みの綱の科学研究費補助金やその他補助金、受託研究のほとんどもその原資は税金です。今後、我が国の経済成長が鈍くなれば、寄附金や共同研究費などの民間資金も厳しくなるでしょう。そして、2018年問題。現在120万人の18歳人口は、再来年から減り始め、15年後の2031年には、99万人と100万人を切るそうな。本学では志願者数の減少はないと思うものの、質の担保のため入学者数の制限も想定され、一定額を保ってきた授業料等収入は、今後減少傾向になることが予想されます。

さらに高齢者世代。2025年には団塊世代が75歳以上になる超高齢化社会を迎え、2042年のピークを境に、以後65歳人口は一転減少方向に。ですが、患者数の減少が病院収入に影響を及ぼすのは2043年より早く、団塊世代が80歳を越え、通院が物理的に難しくなる2030年以降になるかもしれません。

となにやら暗い未来に対し30年間、各大学とも何も対策せず、成り行き任せならば、一体どうなるか、決算課で予想してみました。それが下の図です。経常収益はおよそ5,000億円も減少？いやいや、我らが国立大学法人には、「世界最高水準の研究・教育の実施」、「タイムスケールの長い基礎研究の永続的な支援」、「需要は多くなくても重要な学問分野の継承」等沢山の果たすべき役割があるはず。なら、どうしたらいいの？ドラえもーん！……ではなく、次号へ。（青）



本部決算課（内線22108）kessanka@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第120回

RELAY COLUMN

本部資産管理部資産課
専門職員 髙野和徳

反省はするけど教訓にはならない（座右の川柳）

恵方巻を食べながらだと“ヒサン”課になります。

TRRRR（電話のベル）……はい“シサンカ”の高野でございます。いえ、“家”ではなく、組織の“課”です。音は一緒ですが、お金持ちは自称“資産家”とは言いません（多分）(^^ゞ

資産課にはお金はありませんが、土地・建物等は山盛りあります。主な業務は、本学が所有する土地、建物及び高額備品等の会計的な管理です。

自分の仕事は、主にキャンパス再整備に伴う土地の取得及び売却です。100年後のキャンパスを見据えて、新たな教育・研究環境を整備するために機能移転・集約し、移転後の跡地を売却してその財源に充てるといった、超巨大な車輪の極小の一端を担っています。

プライベートでは、娘の通う小学校のPTA会長をしています。「どうしたら児童らに喜んでもらえるのか!?」と手探りをしながらの3年間、おかげでチビっ子らの記憶に残る名物オヂサンになりました。今では最寄りの駅で見つかると遠くから指を指される始末で……。地元では悪さができなくなりました(>_<)

地域の大運動会に小学校PTA会長として参戦。

得意ワザ：週に三度の二日酔い！
自分の性格：大小あれば間違いなく大きい葛籠を選びます
次回執筆者のご指名：岡田教和さん
次回執筆者との関係：10年振りの再会でも意気投合!!
次回執筆者の紹介：頼まれごとは断らない熱い魂の道産子

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部 第123回

共同研究契約における知的財産権等の取扱いについて

共同研究契約には、「研究テーマ」、「研究担当者」、「研究期間」、「研究経費」のほか「研究成果の取扱い」や「成果の公表」等について定めますが、知的財産権等の取扱いについて特に注意すべき点は、以下のとおりです。

共同研究から得られた発明の取扱いはどのように考えたらよいでしょうか？

本来発明の具体的取扱いは、共同研究契約時に定めるのではなく、個別の発明が生じた時点で発明ごとに、大学、企業それぞれの発明への貢献度（保有専門知識・技術、ノウハウの活用度を含む）および、発明自体の価値を踏まえて、実施料など発明の実施条件について別途協議すべきものです。

企業から、共同研究の成果を実施するために、本学が現に保有する知的財産権を無償提供するよう、予め求められています。

当該企業が求めているのは、BIP（Background Intellectual Property）の無償実施許諾です。予めBIPの無償実施許諾を認めることは、どの知的財産権が対象になるか不明なまま許諾を約することになりますし、他の研究者の知的財産権にも影響する可能性がありますので、研究成果の実施に必要なBIPがわかった時点で実施条件等について協議すべきです。

研究成果の公表に関する条項について、気を付ける点は何ですか？

成果発表の事前同意が必須で、修正や停止等を求められる可能性がある場合は、受け入れるべきではありません。上記ほどではなくても、過剰な制限は大学の研究成果発表の自由を阻害することになりかねず、大学・大学研究者にとり好ましくありません。

本学では、共同研究に関する基本的な考え方をもとに、契約書雛形を作成しています。また、『共同研究から得られた発明等の取扱に関するガイドライン』や、『共同研究契約書条文解説』を作成し、学外に公開することにより、東京大学における共同研究に対する考え方を明示するとともに、相手方企業の知財・企業戦略に応じた柔軟な条件での協議に対応しています。

共同研究をお考えの際には、まず、ご所属の部局の共同研究受入担当にご相談ください。

http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/

インタープリターズ・バイブル

第103回

総合文化研究科 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター部門
渡邊雄一郎

余白と想像力

この時期、さまざまな手書きの提出物をよむ。スペースは十分なのに、左上に小さく字を並べて書かれて広大な白い空間が残されているものが出てくる。PCのディスプレイ上のワープロにむかって、字を入力している感覚なのであろうか。手書きもワープロも同じ感覚でできることへの羨望もあると同時に、白い空間に対する思いの違いもあるのかと思う。手書きで育った人間から見ると、どうもおびえているようでもあり、全く周囲を気にしない感覚にもみえる。黒字以外の部分は真空と同じ何もない空間に感じるかもしれない。

書道展などをみていると、字が生きていることを感じる。たとえば気持ちが入っているなどと表現する。そのときに筆運びにも目がいくが、同時に余白の使い方にも感じ入ることが多い。黒と白のコントラスト、全体のバランス、局所的なかすれなど、白を活かしながら黒を使っている。ここは黒、ここはゆずれないといった拮抗する緊迫感，そこから書いた人の人間性まで伝わってくる。ここは黒であって白ではいけないといった雰囲気が醸し出されている。字を書く際に、直感的に黒と白の対峙、全体の中での今のストロークの局面を直感しているようで非常にうらやましい。

ここで美の世界から現実的なことを連想してしまった。人がある行動をしようとした場合、それをやった場合と、やらなかった場合とのバランスを素早く判断する能力が非常に重要であることを昨今感じる。飛行機に乗ると安定飛行になっても、シートベルトの着用を継続してほしいというアナウンスがあるが、多くの人は苦しい、格好が悪いなどと感じるのか外している人が多い。バスにのってシートベルト着用をアナウンスされても、着用しないことに慣れている人は多い。乗用車の場合には着用率は高いが、公共交通ではあまり達成されていない。その辺が今回の深夜におけるバス転落事故を大きくしたのかもしれない。黒と白の選択肢があった場合、白は何もない“透明”なのではなく、今後いかなる局面がどの程度のリスクをもって起こりうるかを想像する能力が必要であろう。でも“透明”を白にするには、失敗、手痛い経験、事故などを人ごととせずに教訓にすることは必要であろう。間接体験を活かせるのはヒトである。

科学技術インタープリター養成プログラム
http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/

救援・復興支援室より

第57回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動（1〜3月）

1~2月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア、福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア
2月29日	第 26 回救援・復興支援室会議
3月	東日本大震災被災地スタディーツアー

ザシキワラシの日常 31

本部企画課係長（遠野分室勤務）
文：**佐藤 克憲**

本学が岩手県釜石市で行っている「東京大学釜石カレッジ」。事業の範囲は幅広く、以前本欄にて紹介した市民向け公開講座や地域の学校に対する学習等への指導・助言以外に専門的研修への協力なども行っています。釜石市からは、日頃アンケート調査などを行う機会の多い市職員や高校教員向けに「統計学講座」の実施について要望があり、同カレッジ開設初年度（平成24年度）から毎年1回同講座を開催してきましたが、毎回20名以上の参加があり好評なことから本年度は2回開催することとなりました。今回私は本年度2回目となる2月2日の講座を視察してきました。

講師は昨年度と本年度第1回目に続き3回目となる石田賢示社会科学研究所助教で、参加者は今回も20名ほどでした。前回は統計調査の調査仕様書を固めるために必要な、標本設計、調査内容、調査方法等についての内容だったそうですが、今回は得られたデータの質を高めることと、データを分析することに関する内容でした。細かい内容については私には理解が難しい部分がありましたが、分かったこととしては、調査に際しては正確性や費用抑制の観点から「設計」が大切であるということでした。

参加者も理解に多少苦労しているようにも見受けられましたが、やはり仕事上の必要性もあってか意識が高く、今後の独学を見据えて石田助教から参考図書を教えてもらったりしていました。今後講義の内容を活かして市政に有用な調査の実施や分析を行い、釜石市の発展に貢献されることでしょう。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」。

（左）講義を行う石田賢示社会科学研究所助教。
（右）質疑応答の様子（独学参考図書についての質問中）。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp　内線：21750（本部企画課）

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/) に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
1月14日	低温センター	平成 27 年度低温センター安全講習会 (第 4,5,6 回) 開催	9月24日
1月20日	本部総務課	梶田先生のノーベル物理学賞受賞記念学術講演会を開催	1月18日
1月27日	本部学生支援課	双青戦で 2 年連続 2 度目の総合優勝！	1月23日
1月27日	生産技術研究所	第 11 回駒場キャンパス技術発表会開催される	10月14日
1月28日	本部広報課	Tell The World が国境を越えたネットワークを学内で作るきっかけを提供	1月26日
1月29日	教育学研究科・教育学部	東京大学乳幼児保育実践政策学セミナー「園におけるリーダーシップ：東アジアの改革動向」	1月10日
1月29日	本部博物館事業課	総合研究博物館小石川分館 建築博物教室第 8 回、第 9 回の開催	1月9日
2月2日	本部広報課	太平洋同盟を知っていますか？	1月29日
2月3日	柏地区共通事務センター	ノーベル物理学賞受賞記念植樹式典	1月29日
2月3日	本部総務課	梶田先生のノーベル賞受賞記念祝賀会を開催	1月29日
2月5日	カブリ数物連携宇宙研究機構	先端科学と哲学の一般講演会「起源への問い」開催	1月10日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
2月1日	本部広報課	退職教員の最終講義（3 月開催分）	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1304_00014.html

CLOSE UP

梶田先生のノーベル賞受賞記念学術講演会を開催

（本部総務課）

梶田先生には年齢に応じた56本のバラの花束（と今後の発展を願う意をこめた57本目の一輪）、さらに教職員や学生のメッセージ入りスーパーカミオカンデ展開図も贈られました。

梶田隆章先生のノーベル物理学賞受賞記念学術講演会が、1月18日（月）19時から安田講堂にて行われました（司会・横山広美先生／理学系研究科）。雪で足元が悪い中、事前申込を経た教職員・学生約600人が詰めかけ、ノーベル賞受賞者の講演をじかに聴く好機に恵まれました。

講演に先立ち、五神真総長が挨拶。その後、史上5人目となる東京大学特別栄誉教授の称号が、総長から梶田先生に授与されました。

続いて村山斉先生（カブリ数物連携宇宙研究機構長）が登壇。縦横無尽の比喩を操りながら、ニュートリノ振動が素粒子物理学の常識を覆す大発見であることを興味深く解説しました。

そして、梶田先生が「ニュートリノ質量の発見」と題して講演。陽子崩壊を捉えるために始まったカミオカンデ実験が自らの出発点だったことを紹介、大気ニュートリノ中のミューニュートリノの数の少なさに疑問を持ったことがターニングポイントだったと振り返りました。

講演後、聴衆との質疑応答、理学系研究科の大学院生からの花束贈呈、教職員や学生からのメッセージが入ったスーパーカミオカンデの展開図も贈られました。スウェーデンに行けなかった聴衆も名誉のノーベルレクチャーの空気を味わい、極小の素粒子の世界と極大の宇宙に思いを馳せる一夜となりました。

CLOSE UP

双青戦で2年連続2度目の総合優勝!

（本部学生支援課）

閉会式に参加した大会実行委員。

1月23日（土）に京都大学北部総合教育研究棟益川ホールにて2015年双青戦の閉会式が行われました。

双青戦（旧東京大学京都大学総合対校戦）は古くは1924年から東京大学・京都大学両校の部ごとで行われてきた定期戦を2009年に総合化した大会で、今年で7回目の開催となります。

「双青」とは東京大学のスクールカラーである淡青と京都大学のスクールカラーである濃青にちなんで名づけられました。

本年の双青戦は本学の24勝18敗2分により、昨年に続いての2回目の総合優勝を果たし、小田滋晃京都大学体育会会長より賞状・トロフィーが授与されました。

次回2016年双青戦実行委員長の壇辻恵見さん（本学運動会総務部）は「次回大会は本学が主管校として行われ、14年に一度の七大学総合体育大会（七大戦）とのダブル主管校となります。両大会でのダブル優勝を目指して各部ではより一層の努力をすると共に、両校の健闘を祈ります」と決意を述べました。

競技の様子（馬術部）。

CLOSE UP 小石川分館 建築博物教室第8・9回を開催 （本部博物館事業課）

タコノキとクマネズミ(左)、ハリネズミの胎仔標本(右)

※ http://www.um.u-tokyo.ac.jp/architectonica/kyositsu.html

「アーキテクチャ」をテーマに様々な分野の研究者が講演を行い、関連した標本を「アーキテクトニカ・コレクション」として展示する「建築博物教室」の第8回（11月21日）と第9回（1月9日）が、総合研究博物館小石川分館で開催されました。

第8回は髙山浩司氏（ふじのくに地球環境史ミュージアム准教授/植物系統進化学）をお招きしての「植物のアーキテクチャ――いのちを繋ぐ種子のかたち」(聴講者59名)。髙山氏は、植物の種子の散布の仕組みから分布と生育環境、また外来種の食害による生態系の改変についてお話し下さいました。クマネズミの食害にあったタコノキの果実の標本「タコノキとクマネズミ」が、小石川分館の常設展示に加わりました。

第9回は小薮大輔氏（総合研究博物館特任助教/比較形態学・進化発生学）による「胎仔のアーキテクチャ――時間と進化をめぐる動物たちの変幻自在な体の組み立て方」(聴講者95名)。体の構造の役割と生後の環境の相互関係によって生じる妊娠期間の必然性と、体の組織の組成順序の関係、その「設計理念」と「仕組み」が提示されました。新たに加わった展示品は、CTデータを基に3Dプリンタで製作した胎仔の成長模型「ハリネズミの胎仔標本」です。

次回「建築博物教室」の開催は2016年4月9日（土）を予定しています。詳細はHP※にて。

CLOSE UP 乳幼児保育実践政策学セミナーを開催 （教育学研究科）

閉会後の記念写真。本セミナーは東京大学幼児教育研究会主催、(公財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構共催、教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター共催でした。

東京大学乳幼児保育実践政策学セミナー「園におけるリーダーシップ：東アジアの改革動向」を福武ホールにて開催いたしました。

現在世界各国で重要テーマとなっている「園（保育・幼児教育施設）におけるリーダーシップ」について、中国・台湾・シンガポールの各国から第一人者をお招きしました。中国の王小英氏（東北師範大学幼児教育学院教授）からは中国の「幼児園園長の専門性基準」と園長研修の実態について、台湾の幸曼玲氏（臺北市立大學幼兒教育系副教授）からは大学と園の協働によるカリキュラム・リーダー育成の取り組みについて、シンガポールのSirene Lim氏（SIM大学専任講師）からはシンガポールにおけるリーダーシップの実践についてご紹介いただきました。パネル討論では、淵上孝氏（文部科学省幼児教育課長）と安達譲氏（全日本私立幼稚園幼児教育研究機構研究研修委員長）より日本の現状や今後の展望についてお話いただきました。

四ヶ国の講演内容を通して、各国の相違点と同時に、欧米諸国と異なる東アジアならではのリーダーシップともいえる各国の共通点が浮き彫りとなりました。当日は保育所・幼稚園・認定こども園等の実践者や研究者等、大変多くの方々がお越しくださり、中国・台湾・シンガポールとは異なる日本独自の状況と課題についてともに考える貴重な機会となり、会場を包み込む熱気とともに充実したセミナーとなりました。

東京大学フォトコンテストのお知らせ （国際本部）

国際本部では、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業で採択された「東京大学グローバルキャンパスモデルの構築」構想のキーワードである「卓越性」「流動性」「多様性」をテーマに、フォトコンテストを実施します。五神総長による「東京大学ビジョン2020」の基本理念である「卓越性と多様性の相互連環」とこれらのキーワードは密接に関連しており、「東京大学ビジョン2020」及び「東京大学グローバルキャンパスモデルの構築」の双方の観点から広報活動を進めるために企画しました。総長賞のiPadを狙ってどしどしご応募を！

1）募集内容
対象者：本学学生・教員・職員・卒業生
募集部門：3部門で写真を募集。
「卓越性」部門：授業、実習、研究活動、発表、サークル活動等、東京大学での卓越した教育研究や教職員・学生生活をとらえた写真
「流動性」部門：留学や国際会議等を通じた海外大学や国際機関での写真や海外から東京大学へ留学や研究で訪れたことがわかる写真
「多様性」部門：多様な国籍・性別・分野の人々の集まる写真
審査基準：写真家としての腕ではなく、部門のイメージに合ったメッセージ性の強さを重視。人物が写っている場合、被写体となる人物の了承を必ず得ること。
募集期間：2016年2月10日（水）～2016年5月18日（水）
2）表彰
総長賞（1名）－ **iPad!!!**
理事賞（計3名：各部門グランプリ）－ギフト券等5千円分
入賞（計30名）－東大グッズ（オリジナルTシャツ）
※総長賞・理事賞は入賞者から選出する
3）応募方法
以下のサイトをご覧ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/res02/contest.html

問い合わせ：本部国際企画課（内線20851）

淡青評論

七徳堂鬼瓦

人文科学の基盤的データベース構築

1992年に発足したユネスコのプログラム「Memory of the World（世界記憶遺産）」の実践的な目的が、最適技術による資料の保存と、地域の慣習や私的財産権を尊重しつつもできるだけ広範囲の公開、特に地球規模でのインターネット公開にあることはご存知だと思う。たとえば、昨年記憶遺産に登録された日本の大規模史料群「東寺百合文書」は、CC BY 2.1 JPによる画像のインターネット公開に踏み切り、衝撃をもって学術コミュニティに歓迎された。日本中世史分野の基本史料群のひとつである「東寺百合文書」の精細画像公開は、今後の研究・教育の基盤として計り知れない効果をもたらすと思う。

ふりかえって、東京大学の文化・学術資源のデジタル化については、全体的にやや散りがかり的な印象が否めないと思っていた。公開された情報は、個別的なプロジェクトや研究費による探求的な成果の寄せ集めで、そこに継続性や汎用性がなく、作り込まれたシステムとデータの保守継続の保証がないのである。しかし、私の理解できる範囲の文系に関する情報に限るが、「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース」や史料編纂所の「SHIPS」（歴史情報処理システム）などいくつかの有用なサイトがあり、特にSATが掲げているように、テキストの信頼性、共同研究の継続性、データベース連携と統合されたインターフェイスなど、すでに個々のデータベースでは課題克服の取り組みの成果があがっている。

私が専門とする日本史分野についていえば、史料は多様であり、また原本が列島各地に大量に残存している。そうした史料の基盤的なデータベースというのは、ひとつの史料についての目録・フルテキスト・画像の三位一体の情報を連携構築したものであろう。厖大な手間暇のかかる史料のデータ化については、日常の研究・教育の業務の中に位置づけて行わなければ、継続して遂行していくことはできないし、またそうする研究上・教育上の意義もあると考える。こうした基盤的な史料データにこそ、人文科学が科学たりうる検証性の根拠があるのであり、さらに自由で発展的な知識データベースは、正確な基盤情報の検索・統合を通して生み出されるのである。

学内では、新図書館構想と相俟って学術情報の基盤整備体制の検討が始まっており期待は大きい。人文科学分野データベースの基盤部分充実の推進と継続性を保証する確固とした体制整備を望みたい。

高橋敏子
（史料編纂所）

東京大学広報室
no.1478 2016年2月23日
〒113-8654　東京都文京区本郷７丁目３番１号
東京大学本部広報課TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
http://www.u-tokyo.ac.jp